

2 0 2 1 年 度
日 本 フ ラ ン ス 語
フ ラ ン ス 文 学 会
関 西 支 部 大 会
2 0 2 1 年 1 2 月 4 日 (土)
大 阪 市 立 大 学

会場 ■ オンライン（Zoom 使用）

参加費 ■ 無料

参加方法 ■ **下記 Zoom の URL** に直接おはいり
ください。

その他 ■ 遠隔開催につき、懇親会はございま
せん。

Zoom 会場 A ■ <https://is.gd/ia0ioO>

Zoom 会場 B ■ <https://is.gd/hAxYDL>

Zoom 会場 C ■ <https://is.gd/Lzz8WN>

合同役員会 ■ 10:00 ～ 12:00 Zoom 会場 B

開会式 ■ 13:00 ～ 13:15 Zoom 会場 A

分科会 ■ 13:30 ～ 15:30 Zoom 会場 A, B

総会 ■ 15:45 ～ 16:45 Zoom 会場 A

閉会式 ■ 16:45 ～ 16:50 Zoom 会場 A

賛助展示 ■ 12:00 ～ 17:30 Zoom 会場 C

■ 17:00 ～ 17:30 **賛助会員プレゼン**

大会本部 ■ 大阪市立大学大学院文学研究科

フランス語圏言語文化学研究室

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

問い合わせ ■ fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp

福島 祥行

2021 年度 日本フランス語フランス文学会 関西支部大会 研究発表会

第 1 分科会 ■ Zoom 会場 A (16 世紀－19 世紀)

① 13:30 ～ 14:00 ② 14:00 ～ 14:30 ③ 14:30 ～ 15:00 ④ 15:00 ～ 15:30

- ① Traduire l'« Ysopet » d'Amakusa (エソポの *fabulas*, Latin を和して日本の口となすものなり, 1592-1593) : entre le Japon et l'Europe
Maxime BONNET (EPHE 博士課程)

司会 ● 伊藤 玄吾 (同志社大学)

- ② レ枢機卿におけるもっともらしさ *La vraisemblance*
涌井 萌子 (大阪大学博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)

- ③ Sur les loges - le dispositif politico-social au théâtre du XVIIIe siècle
横田 宇雄 (京都大学博士後期課程)

司会 ● 友谷 知己 (関西大学)

- ④ ジャン・ロラン *La Petite Classe* における対話形式の美術批評
辻 昌子 (大阪市立大学研究員)

司会 ● 吉田 典子 (神戸大学名誉教授)

第 2 分科会 ■ Zoom 会場 B (語学・20－21 世紀)

① 13:30 ～ 14:00 ② 14:00 ～ 14:30 ③ 14:30 ～ 15:00 ④ 15:00 ～ 15:30

- ① フランス語圏におけるラップミュージックシーンの現状 ― その歌詞表現と社会性に関する考察 ―
安彦 良紀 (大阪市立大学後期博士課程)

司会 ● 高岡 優希 (大阪大学)

- ② 言説にとって社会とはなにか? ― ワイン言説を例に ―
鈴木 隆芳 (大阪経済大学)

司会 ● 福島 祥行 (大阪市立大学)

- ③ ミシェル・ウエルベック *Rester vivant* における「書くこと」― パゾリーニ *Saint Paul* との比較を通じて
西村 真悟 (京都大学修士課程)

司会 ● 篠原 学 (大阪大学)

- ④ ミシェル・フーコーにおける主体機能について
池田 信虎 (大阪大学博士後期課程)

司会 ● 細貝 健司 (立命館大学)

**« Traduire l'Ysopet d'Amakusa (エソポの fabulas, Latin
を和して日本の口となすものなり, 1592-1593) :
entre le Japon et l'Europe », présenté devant la Société
de Langue et de Littérature Française**

Maxime Bonnet (EPHE)

Entre la grande Histoire, l'histoire des idées et l'histoire de la langue, nous proposons dans cette intervention de revisiter un texte bien connu mais, somme toute, relativement peu étudié : les *Fables* d'Esopé, publiées pour la première fois au Japon en Amakusa sous la direction du frère coadjuteur Fucan Fabian.

Après un bref rappel du contexte historique de production (le désenclavement de l'Europe, la Mission et le « Christianisme Pacifique »), dans lequel nous tâchons de présenter le « Siècle Chrétien » comme composante indissociable et constitutive de l'époque ainsi que de la culture Azuchi-Momoyama (dont nous situons le terme avec la terrible répression de Shimabara), nous rappelons l'intérêt de ces *Fables*, dans la perspective d'un premier transfert culturel du fond grégoromain, via la matière ésopique, contemporain de nombreux autres transferts (technologiques entre autres) d'importance, tels la grammaire gréco-latine. Nous précisons ainsi nos options et méthodes de travail (histoire globale, épistémologie des sciences

humaines, linguistique diachronique).

Enfin, nous exposons la matérialité de l'imprimé, son histoire depuis sa redécouverte par Satow jusqu'à sa récente numérisation ; son intérêt de premier ordre pour les études consacrées au Japonais Moyen (XIIIème-XVIIème siècle), ainsi que, dans la perspective qui nous intéresse tout particulièrement ici, pour celles consacrées à la littérature comparée (France-Japon). Nous insistons de nouveau sur l'impérieuse nécessité de traduire ce texte, partie intégrante de ce que nous proposons d'appeler un « corpus ésopique étendu », élargi par la mise en vernaculaires d'une matière patrimoniale européenne et propagé bien au-delà de l'Europe à l'heure des « Grandes Découvertes ». Pour terminer, à la faveur de quelques observations sur la langue et le style, nous prenons, à titre d'illustration, une fable du corpus japonais, avec sa traduction française, en regard avec les variations que donnèrent de cette même matière un La Fontaine au XVIIème ou un Florian au XVIIIème.

レ枢機卿におけるもっともらしさ *la vraisemblance*

涌井 萌子（大阪大学 博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

『メモワール』*Mémoires* を書いた人物として今日知られているレ枢機卿 Jean François - Paul de Gondi, Cardinal de Retz は Grands écrivains de la France から初となる作品全集が編纂された 1870 年代当初、その『メモワール』によって彼の生きた 17 世紀中葉の社会およびレ枢機卿の個人的な経験を活写した人物として、歴史学の側面から注目された。

これに対し、彼を「雄弁家」*orateur* という観点から再解釈するようになったのはプレイヤード版（1984 年）以降であり、レ枢機卿のレトリック分析については、Honoré Champion 社から出版された全集の編者である Jacques Delon の先行研究が第一に挙げられる。全集に付された Delon の研究が、レ枢機卿のテキスト内で用いられるレトリックの具体的なテクニクについての指摘が中心であるのに対して、彼の研究書『レ枢機卿 雄弁家』*Le cardinal de Retz : orateur* にまとめられた研究成果は、レトリックの論証方法や装飾を伴って、テキストを通して表現されるレ枢機卿の自己表象に関する内容である。そこで Delon は、レ枢機卿が 18 歳の時の著作である『フィエス

ク伯ジャン＝ルイの陰謀の歴史』以降、『メモワール』に至るまで見られる「英雄的行為／精神」*héroïsme* を称揚し、テキストで描き出す自己像の各所でその性質が認められることを指摘している。レ枢機卿のこの態度は、ゴンディ家が帯剣貴族であり、軍事色の強い出自であることと、彼が受けたイエズス会教育の影響によるものとされてきた。

しかし、『フィエスク伯〜』と『メモワール』をつなぐ時期に書かれた論争文書であるマザリナード *mazarinades* を見ると、レ枢機卿を称賛すべき根拠とされるもっともらしさ *la vraisemblance* は、説得対象であるパリの民衆を意識した、パリの守護者としての軍事的な英雄像が最前面に押し出されたものではない。むしろ、彼の聖職者として求められている道義的責任や、より一般的な理性に要求された「節度」*modération* を尊重する態度が、レ枢機卿の言動を称賛する根拠をなしていることが分かる。

本発表では、先行研究で示された英雄的行為を重視するレ枢機卿という見方に対し、レ枢機卿が作品内で提示する自己像に対して、「節度」に重点を置いた新たな観点を提示する。

Sur les loges – Le dispositif politico-social du théâtre au XVIIIe siècle

横田 宇雄（京都大学 大学院 博士後期課程（休学中））

L'architecture théâtrale connut un moment d'évolution entre les années 1870 et 1890, avec le mouvement qu'on appelle *néo-classique*. L'étude des dessins d'architecture de cette époque soulève une question : pourquoi les spectateurs sont-ils restés présents sur la scène malgré l'opposition des artistes et des architectes. Elle est liée aux caractères propres du théâtre français du XVIIIe siècle. Le style du théâtre est principalement configuré par le conflit entre la simplicité et le *mœurs*. L'écart entre la simplicité et le « goût » atteint son comble avec les loges de l'avant-scène qui contient les spectateurs. Cette présence est dominante pendant tout un siècle. La vue n'est pas privilégiée par rapport au son selon Patte. La forme de théâtre optimale pour l'optique et l'acoustique est principalement influencée par les *mœurs*. La nouvelle théorie « scientifique » n'a pu venir à bout des loges. Comme Patte, les architectes de cette époque ont tenté de mettre en valeur l'arc d'avant-scène en tant que cadre. Cependant, dans la pratique, l'avant-scène n'est pas devenue un cadre neutre : elle est restée un

lieu d'apparat où les « femmes » sont éclairées et offerte à la vue des spectateurs. Sur la conception de renouvellement de l'Opéra-Royal de Boullée, les éléments qui expriment le « goût » sont les colonnes en style antique et les femmes, qui donnent une image de fête. En fait, l'image même de la fête représente la morale du théâtre. On dirait plutôt la co-conscience des spectateurs, le code socio-politique du théâtre. Pendant trente-ans, de la Révolution au début de XIXe siècle, en passant la Terreur, la forme du théâtre était aussi un enjeu politique et pas seulement dans l'intérêt des bourgeois. Avec Boullée et Ledoux, les conceptions du théâtre se sont succédé pour aboutir à l'intégration du public dans une forme au diamètre parfait. Mais le projet n'a pas été réalisé à cette époque. Le théâtre n'était pas encore modernisé mais nous y trouvons l'une des origines de sa modernisation. La conception néo-classique ne vise pas à figer la scénographie théâtrale mais en tente la modernisation, jusque dans l'architecture post-moderne.

ジャン・ロラン *La Petite Classe* における 対話形式の「美術批評」

辻 昌子（大阪市立大学 研究員）

ジャン・ロラン(1855-1906)が 1895 年に出版した *La Petite Classe* は、日刊紙『エコー・ド・パリ』に掲載された時事コラムのシリーズをまとめたものである。「ほどほどに教養があり」「ひどいスノッブ」であるバランゲル夫人とその取り巻きたちによる対話形式を多用したコラムで、パリで催されるサロンや各種展覧会に彼らが出かけ、日常生活を交えたとりとめもないお喋りを繰り広げる様子が描かれている。モーリス・バレスはその序文において、「芸術好き」を自称するひとびとを痛烈に批判している。バレスがこのような「凡庸な作品」に序文を書いたことは、ひとえに「下劣な」人々への嫌悪感を表すためであったというフランソワ・モーリアックの指摘は、ロランが長年置かれてきた過激な世紀末趣味の作家という評価を端的に示しているといえるだろう。しかし近年、世紀転換期に活躍した「ジャーナリスト作家」たちに関して、メルム＝モントバンをはじめとする研究が進むとともに、当時の人気ジャーナリストとして影響力を持っていたロランを再評価する動きは急速に進んでいる。本発表は *La Petite Classe* を、書籍というかたちで読むだけではなく、「メディアの文脈」のなかで読むことを前提とされた「ジャーナリスト作家」のスタイルで書かれたテキストとして捉えなおそうとする試みである。またロランが *La*

Petite Classe の元の記事を投稿し始める 1890 年代初頭は、ロランが本格的に美術批評に取り組み始める時期であり、対話形式はフィクションにおいて彼が好んで用いた手法でもあった。対話形式および、自分自身や他者のテキストをコラージュするという、ミルボーをはじめとする当時の「ジャーナリスト作家」たちに顕著なスタイルを、美術批評においてもロランは適用している。90 年代において、芸術的な価値観を決定してきたアカデミーという絶対的な権威は大きく揺らぎ、さまざまな美的価値を判断することは次第に受容者側に移りつつあった。ロランが提示する対話形式は、メディアの中で展開されることによって、現実と虚構の境界を曖昧にしたうえで、読者たちにも類似の噂話を促し、新しい趣味の生成の場に読者自身が能動的に立ち会うことを可能にしている。ドレフュス事件を契機として、ジャーナリズムの担い手の中心が「文学者」から「知識人」へと移行していく過渡期にあった世紀転換期において、ロランがメディア上で展開する虚実織り交ぜたテキストは、何を語るのかではなく、「いかに語るか」という問題を浮上させると同時に、新聞読者が新聞紙上で響き合う記事同士の「対話」をいかに読み解いたか、という「新聞を読むことの楽しみ」を理解する一端となるのではないだろうか。

フランス語圏におけるラップミュージックシーンの現状 — その歌詞表現と社会性に関する考察 —

安彦 良紀（大阪市立大学 大学院 文学研究科 後期博士課程）

本発表の目的は、韓国に出自を持つベルギーのラッパーKoratの楽曲、*Espèce de Chinois*「シノア（中国人）野郎」の歌詞分析を通して、フランス語圏地域における今日のラップミュージックの多様性や、歌詞表現の中での社会性について考察することにある。

1980年代頃にアメリカからヒップホップ文化の一要素として伝来したラップミュージックは、90年代以降、フランス語圏内でのメディアの露出が増加したことや、スター的ラッパーグループが登場したことにより、独自のシーンの形成や、変遷を続けてきた。また、90年代半ば頃から、フランスはアメリカに次ぐ、第二のラップ大国と称されている。さらに、近年においては、フランス語圏地域全体のメジャー音楽シーンにおいて、ベルギーのラップミュージックが、多大な人気を博すに至り、著しい発展を続けている。

一方で、ラップミュージックの歌詞表現に着目すると、様々な社会性を見出すことができる。1980年代後半から90年代を全盛期として活動したアメリカのラップグループ Public Enemy が、マルコム X やブラック・パンサーといった、急進的な黒人運動から影響を受けた政治的メッセージ色の強い楽曲を披露して以降、一部のラップミュージックは、社会風刺的な機能を帯びていることが広く知られることとなり、このような機能を帯びた楽曲は、コンシャスラップと呼ばれるようになった。また、フランス語圏地域においても、ラップミュージックがアメリカから伝来し、フランス語による楽曲制作の実践がされて以降、コンシャスラップ、さらにはプロテストソングと見做しうる楽曲が作成され続けている。

一方で、ラップミュージックの歌詞には、女性蔑視的、もしくは同性愛嫌悪的な表現が用いられる場合があり、これまでに幾度と問題視されてきた。しかしながら、近年においては、LGBT 当事者がラップを通して、性差別の実態を社会に訴え、抵抗するといった事例も見られる。さらに、ラップミュージックは元々、アフロアメリカンの若者達によって生み出された音楽ジャンルであるため、当初の歌手のほとんどは黒人達であったが、今日では民族的ルーツのほか、政治的、社会的立場や主張が多種多様な歌手が存在すると同時に、極右政党支持を唱える楽曲、さらには排外主義を訴える楽曲など、差別として機能しうる楽曲までもが作り出されている。しかしながら、フランス語圏地域における、コンシャスラップを題材とした先行研究の中で取り上げられる楽曲のほとんどは、黒人、もしくはアラブ人のアイデンティティを持ったラッパー達が、被差別者側の立場から作成したものが大多数であり、今日における歌手のルーツ、または政治的立場や主張の多様性についての言及があまりされていないことが指摘できる。

そこで、本発表では、今日のフランス語圏地域のラップミュージックの多様性を示す一例として、韓国に出自を持つラッパーKoratが、自身の日常生活における体験を踏まえつつ、アジア系に対する差別や偏見の実態について歌った楽曲、*Espèce de Chinois*「シノア（中国人）野郎」の歌詞分析を試みる。また、本発表においては、歌詞内容のほか、Koratによる言葉遊びを多用した独自性のあるライム（韻）にも着目し、分析を行う。

言説にとって社会とはなにか？ ——ワイン言説を例に——

鈴木 隆芳（大阪経済大学）

わたしたちが、あるひとままとりの言葉の意味がわかったと感じるとき、そこではどんなことが起きているのか。「これは机だ」という指示文から成る言説は、ことによると、机に座っている人の行儀を咎めているのかもしれないし、あるいは、教科書第一課の例文 *C'est une table* の訳を披露したのかもしれない。オースティンは『言語と行為』の冒頭で言説の役割を述べるにあたって、記述と遂行のちがいをいったんは定義しておきながらも、しだいにこの区別に留保を施すようになる。「猪が突進してくる」という発話は事態を記述すると同時に警告でもあるだろう。おそらく、発話には、程度の差こそあれ「警告」「契約」「約束」「命名」といった働きかけの要素が伴い、それらが前景化したとき、当の発話は遂行的と感じられるのではないか。ある言葉の連なりが、記述か遂行かのいずれに傾くかは、状況によるのだろう、と。

ここでいう状況の扱いをめぐる、方法論は大きく二つに分かれる。

ひとつは、状況を副次的な事象と見なし、捨象する考え方である。いかなる声で発音されようとも、有声性の有無が音素 /p/ と /b/ を区別するように、また、いかなる共同体であろうとも、交換の有無が婚姻の弁別特徴となるように、ここでの分析は、多様な事象の渦中から、単純かつ均質な対立項を抽出することを目指している。

ただ、構造主義の方法論に懐疑的な今日では、こうした思考モデルを無条件に適用できる領域はほとんど残されていない。弁別特徴を判定する主体の超越性や、共時体系の静態性といったものがすぐにも批判的になる。

もう一方には、したがって、状況を言説と不可分なものとみなす考え方が対置される。ここでは、状況は、一般に社会と呼ばれる言説環境と重なりあう。バフチンが間接話法と対話について示した考察では、言説の個別性と完結性が

一貫して否定されている。言説は、一見、単独で扱いうる対象に見えたとしても、常に他の言説と補完しあっているという。顕在化の度合いはさまざまだが、いかなる言説も、主節として従属節に従え、従属節として主節を戴くことには変わりがない。さらに、言説は先立つ言説への応えであり、後続する言説への問いかけでもあるのだ。こうした動的かつ非集権的な状況の社会性は、変化、更新、交通といったイデオロギーを称揚するポスト構造主義の思想と相性がよい。

「赤ワインには肉、白ワインには魚と一般には言われますが、こだわらず、ご自身のフィーリングで選びましょう」というメッセージは、赤白の対立を無化しつつも、上位の水準で、こだわりの有無という対立項を導入することで、遂行的な価値にアクセントを移し、結果、二つの階層を弁別するに至る。そこに見出されるのは、教義に身構えることなく平然としていられる支配層と、ボロが出ないようワイン律に戦々恐々とする被支配層である。

ブルデュー自身は、レヴィ＝ストロースとの直接の関係を否定しているが、それでも『ディスタクシオン』の社会的空間を表す座標は、資本の質と多寡が弁別特徴として機能することで成り立っている。どうやら、二項対立の原理と社会は、まるで相容れないというわけではなさそうだ。

本研究は、弁別特徴を抽出することを目的とする点において、ポスト構造主義の形而上学とは異なる。一方、その作業の過程において、開かれた社会を経るという意味では、構造主義や音韻論モデルとも一線を画す。ワイン言説という、文化資本の傾向が強い領域において、主体が実践を通じて経験した闘争や象徴暴力の例を取り上げつつ、言説が社会とのやりとりの中で、どのように価値を帯びていくのか、さらに、そこでは主体はどのように形成されるのか、そうしたことを考えたい。

ミシェル・ウエルベック *Rester vivant* における「書くこと」 ——パゾリーニ *Saint Paul* との比較を通じて

西村 真悟（京都大学 修士課程）

ミシェル・ウエルベックの小説において、主人公のほとんどが何かを書く存在である。このことからウエルベックにとって「書くこと」が重要であると推察される。では、それはどのような点で重要なのか。この疑問を解くための端緒として、本発表ではウエルベックが1991年に出版したエッセイ *Rester vivant* を取り上げる。このエッセイでウエルベックは、読者に対して詩人となって「書くこと」を命じ、その目的や方法を示している。彼は2016年に同じタイトルで展覧会を開催しており、それに関するインタビューのなかで *Rester vivant* という言葉を「一種の死の否定」だと述べ、それが自身のかつてのマニフェストであったとしている。したがって、ウエルベックにおいて「書くこと」は死を否定することにつながると考えられる。さらに、まだ作家として名を知られていないウエルベックの作家としての初期衝動がそこに現れているとも考えられる。また、彼は *Rester vivant* の執筆にあたり、パウロから影響を受けたことを公言しており、その際にパゾリーニによる *Saint Paul* というシナリオの名前を挙げている。しかし、この影響関係は現在までほとんど取り上げられてこなかった。そこで本発表では、*Rester vivant* と *Saint Paul* を「書くこと」という観点から比較することによって、前者における「書くこと」の役割を明らかにすることを目的とする。

まず、*Saint Paul* ではふたりの書く存在が対照的に描かれていることを指摘する。書く存

在の一方はパウロの言葉や行動を歪曲して後世に伝えるルカであり、他方は周囲に見放されてはじめて書く存在となるパウロである。この対立構造と、パウロによって書かれた手紙の空間的移動を、書かれた当時から現代への時間的移動に重ね合わせるというパゾリーニの演出構想のふたつに注目することで、このテキストにおいて「書くこと」が、他者による歪曲を逃れて自分自身の言葉を後世に伝えるために必要不可欠な行為として扱われていることを明らかにする。

次に、*Saint Paul* における書く存在への成り方と「書くこと」による言葉の後世への伝達というふたつの点を踏まえて、*Rester vivant* における「書くこと」を分析する。後者においても、書く存在となるための条件として社会的な孤立が挙げられているということと、「書くこと」の機能が自らの作品の後世への伝達だとされていることを類似点として示す。加えて、*Rester vivant* においては自らの作品の「書くこと」による時間的移動のみに焦点が当てられていることと、その末尾で永遠というテーマが明確にされていることに着目し、*Rester vivant* における、すなわちウエルベックの初期衝動における「書くこと」と「生きてあり続けること」の関連についてのひとつの解釈を提示する。それは、ウエルベックにとって「書くこと」とは、自らの言葉のなかで永遠に「生きてあり続ける」ことを可能にする営みであるのではないかというものである。

ミシェル・フーコーにおける主体機能について

池田 信虎（大阪大学 大学院 人間科学研究科 博士後期課程）

ミシェル・フーコー(1926-1984)の思想変遷は一般的に、言説に着目した 1960 年代、権力を分析した 1970 年代、主体論を論じた 1980 年代という前期・中期・後期の区分が用いられる。他方で、フーコーはその晩年に自身の研究が常に主体(sujet)を問題としていたとも語っている。この発言が回顧的なものであることには注意すべきだが、フーコーの思想変遷全体について、主体に関するある統一性を見出すことは可能であろう。本発表では、フーコーの「主体機能(fonction sujet)」という概念に着目し、1970 年代の主体論を明らかにし、同概念の成立過程に着目することで、これまで見過ごされてきた前期と中期の理論的な連続性、すなわち言説論と権力論の連関性を示すものである。

のちに『監獄の誕生』(1975)で取り上げられる規律権力論の初出に当たる 1973 年 11 月 21 日のコレージュ・ド・フランス講義において、主体機能はフーコー独自の権力論内部で登場する。ギヨーム・ル・ブランらによる先行研究において主体機能は、身体に付与されることで人間が主体として振る舞うことが出来るものとして分析が行われていた。ル・ブランの関心は時代によって異なる権力関係が、異なる様式で行う従属化(assujettissement)、言い換えると従属による主体成立の過程解明に集中しており、ルイ・アルチュセールとフーコーの主体形成に関する理論的共通性を示す等、一定の成果を上げている。

しかし、これまでの先行研究では前述した時期区分の影響が強く、フーコーが主体機能についてそれ以前、つまりは言説理論において既に論じていたことを見落としている。そこで本稿ではフーコーによって主体機能が初めて取り上げられた 1969 年の講演「作者とは何か？」を参照することで、主体機能の内実と射程についてより仔細に分析を行う。

講演「作者とは何か？」において、フーコー

はその前年に『知の考古学』(1968)で示した独自の言説分析理論に基づき、文学作品の作者とは何を意味するのかについて論じた。その際、作者とは文学作品の外部にいるその作品を著した個人ではなく、作者の名前という固有名によって特定の個人が占めることの出来る位置を文学作品という言説とその外部の社会との境界に成立させる働き、すなわち「作者機能(fonction auteur)」として論じられる。重要なのは、この作者機能が主体機能の一つの事例として論じられることである。

講演「作者とは何か？」を通じて規律権力論を読むことによって、すなわち、言説理論における作者という主体の議論を通じて権力関係における従属した主体の成立を分析することで、これまで顧みられることのなかった共通の問題構造が浮かび上がる。それは主体機能の「ピン留め(épinglage)」という問題である。時系列に沿ってフーコーの理論を再確認すると、まず主体機能の一例として導入された作者機能という概念によってフーコーが批判していたのは、一つの言説について、それを語ったものとしての作者が一人の個人としてピン留めされる、すなわち固定されることであった。規律権力論においては、近代の権力が主体機能を身体的単一性にピン留めすることで、言い換えるならば、主体としての働きを個別化された身体へ固定化することで、近代的な主体を形成しており、フーコーはこの固定化メカニズムを批判していた。

本発表によって、これまで 1960 年代の文学論や構造主義との連関によって分析されてきたフーコーの作者論が、権力論における近代的主体批判というのちの問題関心へと連続していることが示されるだろう。また、ここでも明らかになる主体機能はフーコーによる主体論を検討する上で、新たな 1970 年代の参照項となるであろう。